日本IT書紀

118 主役は青空

07 明彩篇
巻之十六 浮寶

佃 均

© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳しい内容は
https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja でご確認ください。

第百十八

主役は青空

一

一九六四年十月十日は土曜日だった。

前日まで東京は雨が降っていて、開会式の天候が危ぶまれた。記憶では当日の十時ごろまで、雲に覆われていたのではなかったか。それが晴れた。

午後一時。

さぁ始まった。

アナウンサーの第一声は

――今日の主役は青空です。

と記憶していたのだが、ＮＨＫの記録ではそうではなかった。

「世界中の青空を全部東京に持ってきてしまったような、すばらしい秋日和でございます」

東京オリンピック開会式の実況中継は、北出清五郎アナウンサーの名調子で始まった、とある。

日本クラシック音楽界を代表した團伊久磨、黛敏郎、芥川也寸志、山本直純が奏でるオリンピック・マーチが流れ、赤茶色のタータントラックに各国の選手団が入場し、ギリシアのアテネから絶えることなく運ばれた聖火が早稲田大学一年生だった坂井義則の手で縄文土器を象った聖火台に点火され、五輪旗が掲げられ、ブランデージ国際オリンピック委員長と昭和天皇のもとで選手宣誓が行われた。

参加国は九十四か国、参加選手は五千百十一人。聖火が走り抜けたのは全国四千三百五十区九千八百二十九キロ、ランナーは正走者、随走者を含め九万六千三百四十七人だった。

過去最大の規模。

独立したばかりで名前を知らない国もあった。

平和の祭典。

そう。

遠くギリシアの時代、オリンピックのときだけ、戦争を止めたという話だった。クーベルタン男爵は、そのためにオリンピックを再興した。

だが、それは間違っていた。

一九四〇年、四四年のオリンピックは、戦争を理由に開催されなかった。そのことをわたしたちは知らなかった。

もう一つ知らないことがあった。

東京オリンピックが開かれていたときでさえ、ベトナム

では戦闘が繰り広げられ、誰かが死んでいた。しかしわたしたちは、オリンピックこそ〝平和の祭典〟だと信じていた。

それから十五日間というもの、わたしたちは興奮に包まれた。水泳やボート、陸上、射撃、馬術などは日本人選手にメダルの期待がかけられていなかったので、最初から〝参加することに意義がある〟という感じだった。

新聞のスポーツ欄に載る国別メダル獲得数の一覧表で、はじめのうち「日本」はずっと下のほうにあった。アメリカとソ連がどんどんメダルの数を増やしていったのに、「日本」はずーっと下だった。

フェザー級重量挙げで三宅義信が日本選手第一号の金メダルを獲得したのを皮切りに、体操、柔道、レスリング、バレーボールで日本チームはメダルの数を増やしていった。もっとも、柔道は東京オリンピックで初めて正式種目になったわけだったから、わたしたちは

――開催国である日本に花を持たせてくれているのだ。

と、別の意味で劣等感を持った。

にもかかわらず無差別級では神永昭夫がオランダのヘーシンクに負けてしまった。柔道の全階級制覇は成らなかった。

ボクシングのバンタム級で桜井孝雄が金メダルというのは、その名前が知られていなかっただけにフロックという感じが強かった。だが実をいえば彼は、当時のアマチュア・ボクシング界で最強といわれた戦士だった。

〝東洋の魔女〟とあだ名された日紡貝塚の女子バレーボール・チームが、映画撮影の練習場として使っていたのが、わたしたちが通っていた中学の体育館だった。大松博文監督や河西昌枝主将などが、いつ回転レシーブを見せてくれるか楽しみに待ち続けたが、彼らはトスとアタックの練習ばかりしていた。

ソ連との決勝戦はフルセットの接戦となり、固唾を呑んで見守っていたとき、レフェリーの笛が鳴った。ソ連選手がタッチネットを取られ、あっけなく日本の金メダルが決まった。

相手の反則で転がり込んできた勝利だった。にしても、

――金メダルは金メダルだ。

わたしたちは口々に言った。

体操の鉄棒では、「鬼に金棒、小野に鉄棒」といわれ絶対的な強さが吹聴された小野喬が、肩の痛みを押して出場した。彼は全国民がハラハラして見守る中で「ひねり跳び越え」のウルトラCで金メダルを獲得した。

その光景はいかにも日本人好みの〝根性もの〟だったし、団体と平行棒で大活躍した遠藤幸雄はたくましい後継者に

見えた。女子の小野清子はのち参議院議員に転進している。正直にいうと、女子体操はまぶしかった。

柔らかな曲線を見せつける体操着姿が跳躍し、開脚し、回転するのは、とても崇高ななにかを見るような思いだった。「チャスラフスカ」という名前が記憶に深く刻み込まれた。

マラソンでは国立競技場のトラックに二位で入ってきた円谷幸吉が、ゴールまであと二百メートルの曲線でイギリスのベージ・ヒースローに抜かれてしまった。陸上競技唯一のメダリストは、次回のメキシコ大会を前にした六八年一月九日、東京・練馬の自衛隊体育学校の自室で自殺。享年二十七。

遺書には

「幸吉はもうすっかり疲れ切ってしまって走れません。父母上様の側で暮らしとうございました」

とあった。

ややのちのことになるが、円谷と同じように、東京オリンピックの重圧に耐え切れず自殺した選手があった。陸上女子八十メートルハードルに出場し、日本人としてただ一人、トラック競技で入賞（五位）した依田郁代である。スタート直前に逆立ちをするのが特徴だった。

彼女は結婚して「宮丸」姓に変ったが、常に「東京オリンピック入賞者」のレッテルがついて回った。一九八三年、没。享年四十五。

日本代表団が獲得したメダルは金十六、銀五、銅八。メダル獲得総数はアメリカ、ソ連にははるかに及ばないものの第三位で、開催国としての面目をほどこした。

二

筆者は中学一年生だったので実体験として知らなかったが、東京オリンピックに向けて様々な大型建造物が建設されていた。主要なものをあげると、羽田空港と都心を結ぶ首都高速道路、国鉄浜松町駅と羽田空港を結ぶ東京モノレール、東京―新大阪間を三時間半で走る超特急新幹線、地下鉄日比谷線、富士山気象レーダー、名神高速道路などである。

新聞社に勤めていた伯父が、新幹線に試乗したときのチケットをくれた。ノーズが突き出た流線型の先頭車両が富士山をバックに疾走する絵が描かれていた。

「沼津まで乗った。いや、速かった」

と伯父は言った。

「これが日本の経済を変えるだろう」

実際、その通りになった。

さらにオリンピック用の競技場、選手宿舎などが建てられ、一般道路が整備された。例えば代々木、千駄ヶ谷、青山にかけての景色は、オリンピックで一変した。カタツムリを思わせる水泳競技場ができ、東京都体育館が建ち、外苑道路に湾曲したコンクリートの壁ができた。

国立競技場は見上げるほどの高さでそそり建ち、広い公園というか広場が設けられた。道路はまっすぐか、もしくは計算されたきれいな弧を描いて作り直され、街路樹とアールのついた水銀灯の列が未来都市を思わせた。

ちなみにこのときの道路整備で、一般国道の舗装に初めてアスファルトが使われている。それまで日本の舗装道路はコンクリートが普通だった。石油資源を節約したためである。ところがオリンピックの開催までに工事を終了するには、コンクリートでは十分に固まらない。

――間に合わせろ。

が至上命令になった。かくしてアスファルト舗装が一般国道にも使われるようになった――という裏話が残っている。

競技場近くの私鉄の駅や新宿、渋谷、東京、上野といったターミナルが改装され、地下道が伸びていった。わたしが住んでいる町は東京都世田谷区の内だったが、まだ菜っ葉の畑や芝生の養場があったり、ほど近くでは梨が栽培されていたし、裏路地に入ると舗装されていない道があったりした。だが山手線沿線の〝東京〟は間違いなく変貌した。

『東京五輪音頭』という歌が流行っていた。

筆者が覚えているのは三波春夫が満面のにこやかな笑みで歌っている姿だが、記録によると三橋美智也も同じ歌を歌っていたらしい。何本もの大きな欅が立ち、その枝葉がうっそうと茂る近くの神社で開かれたその年の盆踊りで、

――あの日ローマでながめた月が……

という浪曲調のこぶしを利かせた、その泥臭い歌が繰り返し流れていた。

三

日本歌謡史では、一九六三年、六四年の二年は〔ゴールデン・イヤー〕として記録されている。とにかくヒット曲が立て続けに出た。

六三年

出世街道、エリカの花散るとき、下町の太陽、島のブルース、こんにちは赤ちゃん、恋のバカンス、一週間に十日来い、若いふたり、島育ち、逢いたくて、高校三年生、見上げてごらん夜の星を

六四年

お座敷小唄、まつのき小唄、東京ブルース、ウナ・セラ・ディ東京、アンコ椿は恋の花、涙を抱いた渡り鳥、柔（やわら）、皆の衆、幸せなら手をたたこう、恋をするなら、ああ青春の胸の血は、君だけを、美しいあした、青春の城下町、二人の星をさがそうよ、サン・トワ・マミー、何も云わないで、愛と死をみつめて、夜明けの歌、ソーラン仁義、東京の灯よいつまでも

「お座敷小唄」に代表される〝小唄もの〟は神楽坂はん子にさかのぼり、〝東京もの〟は「東京だよおっ母さん」に続く第二次ブームということができた。青春歌謡あり、シャンソンあり、悲劇のドラマものありという中にあって、歌謡史上に特筆すべきは「演歌」というジャンルが確立されたことだった。

すなわち都はるみ、水前寺清子、村田英雄、北島三郎、新川二郎である。

さらにいうと「皆の衆」は農村からの出稼ぎ労働者への応援歌であって、その背景には農村部の過疎化という社会問題が潜んでいた。また「東京の灯よいつまでも」は集団就職で東京にやってきたものの都会暮らしになじむことができなかった農村出身の若者の挫折を、

――雨の新宿、夜霧の日比谷……

と歌い上げた。

東京に出る恋人との別れを謳った「赤いランプの終列車」「別れの一本杉」「東京にイッチッチ」の返歌ともいうべき位置にあって、ここからもまた都市と農村、過密と過疎の問題を読み取ることができる。

こうした歌のメロディを、完全ではないにしても、鼻歌感覚で思い出すことができる向きは、間違いなくオリンピック世代といっていい。この世代はいわゆる「団塊の世代」ないし〝遅れてきた世代〟であり、やや年長者は六〇年安保を、やや年少者は七〇年安保を、何らかのかたちで身近に感じて育ったはずである。

筆者の記憶では、このときの首相は池田勇人という、眼鏡をかけたガラガラ声の人物であったように思うのだが、オリンピックの開会式に出席していたかどうか、明確でない。

年表によると、

――池田は体調を崩し、オリンピックが閉幕するのを待って首相を辞任した。

となっている。実はガンだったことはあとで分かった。

後任は佐藤栄作であった。

「エーちゃんと呼んでほしい」

と言った、あの人物である。

大まかに一九六〇年代の前半をまとめると、

・高度成長政策による所得上昇
・家庭用電化製品の第二次普及期
・大衆車の第一次普及期

ということになるであろう。

所得の上昇を示すのはエンゲル係数である。一九五一年の全所帯における所得に占める食料費の割合はほぼ五〇％だった。これが六五年になると三五％に低下した。人々はようやく生活にゆとりを感じることができるようになっていた。

一九六〇年に大流行した「ダッコちゃん」「フラフープ」「インスタントラーメン」こそゆとりの象徴だった。

玩具メーカーのタカラが発売した「ダッコちゃん」は、なるほど南洋の子どもをイメージさせるデザインではあったが、よく考えてみれば緑と黒でスイカを表現したビニール製ビーチボールと何ら変わらなかった。

ただ見る角度によって左右の目がウインクして見え、手足が人の腕に巻きつくようにデザインされている点が、ビーチボールと異なっていた。

フラフープにいたっては、色の付いたプラスチックの円環に過ぎなかった。この中に人が入り腰に当て、落ちないように回転させるのである。ハワイ語の「フラ」（腰を揺する）がその名の由来だった。

いかに長時間、床に落とさず回し続けることができるかを競うコンテストが開かれたり、脚や首や腕で何本も回す曲芸まがいの芸当まで登場した。

ダッコちゃんとフラフープの流行から、わたしたちは少なくとも二つのことを読み取ることができる。

第一は、ポリエチレン、テトロン、ナイロン、ビニール、プラスチックなど化学樹脂が日常生活に入り始めたということである。

第二は、当時の日本人にとって、ようやく海外旅行が〝憧れ〟の範疇に入ってきたということである。『兼高かおるの世界の旅』で見たモノクロの「ハワイ」こそ、その代名詞だった。

経済企画庁の統計によると、電気冷蔵庫の普及率は一九五八年に三％に過ぎなかったが、六一年には二五％、六五年には約七〇％と飛躍的に上昇した。電気洗濯機は五八年が二五％、六一年が五五％、六五年は七〇％に達している。

オリンピックのころ、十軒に七軒は電気炊飯器（電気釜）、テレビ、電気冷蔵庫、電気洗濯機の「四点セット」

を保有していたことになる。

乗用車も同様だった。乗用車の年間生産台数は一九五四年に初めて一万台を超え、五五年に二万台、五七年に五万台、五九年に八万台、六一年に二十五万台、六三年に四十一万台と驚異的な伸びを示した。自動車産業は、十年間で実に四十倍以上の成長を果たしたのだった。

こうした耐久消費財の市場の形成には、テレビという新しい情報提供メディアが大きな役割を担った。

「うちのパパは世界一」「パパはママに弱いんだ」といったアメリカのホームドラマが日本語に吹き替えられて放送され、そこに映し出される擬似的なアメリカ人の家庭が日本人の憧れになった。そこに映像の効果を最大限に利用した広告宣伝が集中的に投入されたのだ。

四

一九五六年に産業界が費やした広告費の総額は七百五十億円だったが、その十年後には四倍の三千億円が投入されていた。

・当りマエダのクラッカー（前田製菓）
・お餅も入ってベタベタと（渡辺食品）
・お湯を注いで三分間（明星食品）
・わっ、わっ、わー、輪が三つ（三ツ和石鹸）
・伊東に行くならハ・ト・ヤ（ハトヤホテル）
・あ・か・るーいナッショナール（松下電器産業）

等々、テレビコマーシャルから数多くの流行語、タレント、コピーライター、デザイナー、構成作家、ディレクターが世に送り出された。

名前を失念してしまったが、社会学者だったか評論家が次のように語っていたことを覚えている。

テレビ受像機が急速に普及、話題のテレビ番組を一家揃ってみることが団欒娯楽の中心になったのである。結婚と同時に、独身時代の四畳半一間のアパートから何とか抜け出して、水道完備・ガス見込みの文化住宅に住み、テレビ、洗濯機、冷蔵庫など電化製品を所狭しと並べ、台所のある部屋の真ん中に赤外線の電気ごたつ、卓上にはミカンやおかきを置き、みんながテレビをみながらそれに手をのばし、「狭いながらも楽しい我が家」を実感する。これがこの頃の「しあわせ」の典型で、「ホーム・ドラマ」も次々と制作された。

また加藤秀俊は論説『混乱から安定へ』（世界文化社）でこう評論している。

戦後の日本人はそれらの耐久消費財を熱心に消費し続けてきた。社会学者が呼ぶ「標準パッケージ」すなわち耐久消費財のひとそろいが、日本の各家庭の生活の目標となり、また生活様式の決定因として作用しはじめるようになってきたのである。

軍需産業から平和産業へ転換した戦後の日本企業にとって、唯一のマーケットは家庭であった。かつて、お国のため、という至上命令によって、公の目的のためにみずからを犠牲にしてきた日本人は、戦後の新時代の中で個人の生活、私生活をより重視する傾向が強くなっていた。

日本製の電気製品や玩具、精密機械、繊維製品などは、性能と品質においてレベルが高く、かつ労働力集約的な体制で生産された結果、優位な国際競争力を持ち、アメリカやヨーロッパに輸出されていった。一ドル＝三百六十円の固定レートの上に立って、日本の産業は急速に外貨を稼ぎ始めた。

この年の年頭、政府や産業界は

――日本はいよいよ世界の経済大国の仲間入りする。

と〝経済大国〟を宣言した。

六三年に実施した貿易自由化に続いて、四月一日にＩＭＦ八条国に移行、さらに同月二十八日には、ＯＥＣＤ（経済協力開発機構）への加盟も認められた。

これにより同機構は、欧米先進工業諸国の経済政策調整、加盟国間の資本移動の自由化や多角的な自由貿易の推進、発展途上国への経済援助実施の調整などを協議する場に変っていた。ここに加盟が認められることは、日本が国際的に「経済大国」「先進国」の仲間入りを果たすことを意味していた。

～～～～　補　注　～～～～

北出清五郎　きたで・せいごろう／１９２２～２００２。四七年日本放送協会に入りテレビ放送開始の五三年から大相撲中継を担当した。五九年の皇太子（現・天皇）成婚パレード、六四年東京オリンピック開会式、七二年札幌オリンピック七十メートル級ジャンプなどの中継も担当した。七九年理事待遇、八〇年退局したが顧問として大相撲の中継を続けた。

團伊玖磨　だん・いくま／１９２４～２００１。東京に生まれ、四二年東京音楽学校（現・東京芸術大学）に入ったが四四年陸軍に応召し戸山学校軍楽隊に配属された。四五年九月復員し学業に復帰、東京音楽学校を卒業して作曲家の道に入った。四八年ＮＨＫ専属、五四年東宝映画専属、六四年「オリンピック序曲」「祝典行進曲」などの作品で知られる。のち「アサヒグラフ」に随筆『パイプのけむり』連載を始め文筆家としても知られた。

黛　敏郎　まゆずみ・としろう／１９２９～１９９７。神奈川県に生まれ四九年東京音楽学校を出て五一年パリに留学した。五三年團伊玖磨、芥川也寸志と「三人の会」を結成し現代音楽を追及するかたわらテレビ番組「題名のない音楽会」の司会を務めた。三島由紀夫とも親しく交友し、晩年は日本主義的傾向を強めた。

芥川也寸志　あくたがわ・やすし／１９２５～１９８９。作家・芥川龍之介の三男。四九年東京音楽学校を出て作曲家となった。映画音楽などを多数手がける一方、ロシア・東欧音楽に影響を受けた歌曲や交響曲を作った。歯切れのいい知的な語り口調と父親譲りのハンサムさが女性の人気を集めた。

山本直純　やまもと・なおずみ／１９３２～２００２。作曲家・指揮者の山本直忠の息子として生まれ、五四年東京芸術大学作曲科を出て映画、テレビドラマ、アニメ、コマーシャルソングなどを手がけた。黛敏郎、芥川也寸志と比べると品のなさそうな顔立ちとだらしなく生やしたヒゲがトレードマークだった。テレビコマーシャル「大きいことはいいことだ」（森永エールチョコレート）、アニメ「おばけのＱ太郎」テーマソングのほか、パロディ音楽という試みの分野を開いた。

ブランデージ　Avery Brundage／１８８７～１９７５。アメリカのシカゴで生まれ新聞配達などをして家計を助けた。イリノイ大学在学中の一九一二年、ストックホルム・オリンピックに近代五種競技の選手として出場した。大学卒業後、建設業で成功しアメリカ・オリンピック委員会から国際オリンピック委員会に進み、副会長を経て第五代会長に就任した。「ミスター・アマチュアリズム」の異名を取るほどオリンピックの商業化を頑なに拒否し冬季オリンピック廃止論を唱えた。

三宅義信　みやけ・よしのぶ／１９３９～　：宮城県に生まれ法政大学を出て自衛隊に入った。学生時代から重量挙げ選手として世界大会で活躍、六〇年ローマ・オリンピックで銀メダル、六四年東京オリンピック、六八年メキシコ・オリンピックで金メダル。七二年ミュンヘン・オリンピックで四位。この間、未公認世界記録四十八回、公式トータル世界記録八回、スナッチ世界記録十三回、ジャーク世界記録六回、世界大会六連覇を達成している。

神永昭夫　かみなが・あきお／１９３６～１９９３。宮城県に生まれ高校生のとき講道館紅白試合で十九人抜きという離れ業で脚光を浴びた。五九年明治大学から八幡製鉄（現・新日鉄）に入り、

六〇年、六一年、六三年と全日本選手権で優勝した。柔道がはじめて正式種目となった東京オリンピックで無差別級に出場、序盤で敗退したが敗者復活戦で決勝に臨んだ。しかし序盤戦で足首を捻挫していたばかりか、身長、体重とも圧倒的な違いがあったためオランダのヘーシンクに押さえ込みで敗れた。のち明治大学柔道部監督となり六八年メキシコ・オリンピックで柔道全階級制覇を果たした。

ヘーシンク　Anton Geesink／１９３４～２０１０。オランダのユトレヒトで生まれ、十三歳から柔道を始めた。百九十八センチ・百二十キロという超重量級の体格を生かして六一年世界柔道選手権無差別級で優勝、六四年東京オリンピックで金メダル。七三年全日本プロレスに入り、ジャイアント馬場、トム・ファンクスなどとタッグを組んだ。七七年オランダに戻り国際オリンピック委員となった。

桜井孝雄　さくらい・たかお／１９４１～２０１２。千葉県に生まれ定時制高校に通いながらボクシングの練習に励んだ。六四年中央大学在学中に東京オリンピックのボクシング、バンダム級選手として出場、金メダル。六五年プロに転じ、東洋チャンピオンとなった。

大松博文　だいまつ・ひろぶみ／１９２１～１９７８。香川県に生まれ日紡（のち「ユニチカ」と改称）貝塚工場女子バレーボールチーム監督となり一日五時間の猛練習で選手を鍛えた。「鬼」とも呼ばれたが六一年欧州遠征でチームは二十二連勝をし「東洋の魔女」の異名を取った。六二年世界選手権で七連勝し優勝。東京オリンピック決勝戦のテレビ中継は視聴率八五％を記録した。回転レシーブ、時間差攻撃といった隠し技で相手を翻弄した。六八年参院選に立候補し当選したが政治家としての活躍はなかった。全国にママさんバレーが広がったのはこの人物の功績とされる。

川西昌枝　かさい・まさえ／１９３３～　：現姓「中村」。山梨県に生まれ、中学、高校とバレー部に所属、日紡に入っても関が原工場でバレー部に入った。五四年、貝塚工場に異動し大松博文監督のもとで猛特訓に励んだ。「東洋の魔女」日紡貝塚女子バレーボールチームのセッター、コーチ兼主将だった。六五年引退し結婚、その後もママさんバレーの指導に当たり、二〇〇四年アテネ・オリンピックでは女子バレーボールチームの団長を務めた。

小野　喬　おの・たかし／１９３１～　：秋田県に生まれ五四年東京教育大学（現在の筑波大学）を卒業後、慶応大学に進んだ。在学中、五二年ヘルシンキ、五六年メルボルン、六〇年ローマ、六四年東京とオリンピック四大会に連続して出場、日本の男子体操を国際的なトップレベルに押し上げた。オリンピック四大会で獲得したメダルは金五、銀四、銅四の計十三個。

遠藤幸雄　えんどう・ゆきお／１９３７～２００９。秋田県に生まれ五九年東京教育大学を出て日大講師となった。オリンピックは六〇年ローマ、六四年東京、六八年メキシコの三大会連続で出場、金メダル五個を獲得した。

小野清子　おの・きよこ／１９３６～２０２１。宮城県に生まれ秋田市で育った。五八年東京教育大学を出て慶応大学体育研究所に勤務、体操選手として競技を続けた。六〇年のローマ・オリンピック女子体操に出場、東京オリンピックで団体銅メダルに貢献した。八六年の参院選で当選し二〇〇三年国務大臣・国家安全委員長、内閣府特命担当大臣（青少年育成及び少子化対策・食品安全）を歴任した。日本オリンピック委員会理事だった。

チャスラフスカ　Vera Chaslwvska／１９４２～２０１６。チェコの炭鉱の町に生まれたが、幼いときから体操競技で才能を見せた。天賦のリズム感、跳躍力、表現力、美貌で東京オリンピックで金メダルを獲得、「チェコの名花」とうたわれた。六八年に起こった民主化運動「プラハの春」で文化人二千人署名に参加したために軍事介入したソ連から反体制主義者とされ、炭鉱での肉体労働や保母の仕事を強制された。同年のメキシコ・オリンピックではソ連や他の共産圏諸国審査員の露骨な過少評価にもかかわらずソ連選手を抑えて金メダルを獲得した。のちも迫害を受け一介の体操の教師として過ごし、国際舞台から姿を消した。しかしソ連の崩壊で名誉を回復し、チェコ・オリンピック委員となった。

円谷幸吉　つぶらや・こうきち／１９４０～１９６８。福島県に生まれ須賀川高校から陸上自衛隊に入った。六三年オークランドで開かれた国際陸上大会二万メートルで五十九分五十一秒四の世界記録を出して一躍マラソン選手として注目を集めた。東京オリンピックでは不振の日本陸上選手団の期待を一身に背負い、国立競技場に二位で入ってきたが、ゴールまであと二百メートルというところでイギリスのヒースローに抜かれ三位となった。

依田郁子　よだ・いくこ／１９３８～１９８３。長野県に生まれは焼くから陸上短距離の選手として注目された。ロサンゼルス・オリンピック陸上百メートルで六位に入賞し「暁の超特急」の異名を取った吉岡隆徳（よしおか・たかよし／１９０９～１９８４）に師事し、女子八十メートルハードルで日本記録をマークしたが、東京オリンピックでは五位に終わった。スタート前に逆立ちしたりトンボ返りをするのが人々の記憶に残った。

エンゲル係数　Engel's coefficient：一世帯あたりの家計総支出に対する飲食費の割合を百分比で表す。その世帯の生活水準を示す指標とされ、係数二〇以下は「すごくゆとりがある」、二五は「生活にゆとりがある」、三〇は「ややゆとりがある」、五〇は「やっと生活できる」の目安とされる。

　ドイツの税務員で、のちにザクセン王立統計局の局長となった社会統計学者のエルンスト・エンゲル（Ernst Engel／１８２１～１８９６）が所得税率を定めるためにドレスデン地方の住民を調査したとき、総所得と食費の関係に一定の法則があることを発見した。日本人のエンゲル係数は一九四七年が六三・〇だったが、二〇〇〇年は二三・三となっている。

日本IT書紀　118 主役は青空

著　者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会
http://www.ossaj.org/
info@ossaj.org

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。

© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳しい内容は https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja でご確認ください。